大先輩の須田剋太をめぐって、国語の船戸安之先生や、「坊っちゃん」の夏目漱石のこと

渡辺　恭伸

熊谷中学時代の卒業生に画家の須田剋太（1906-1990）がいる。

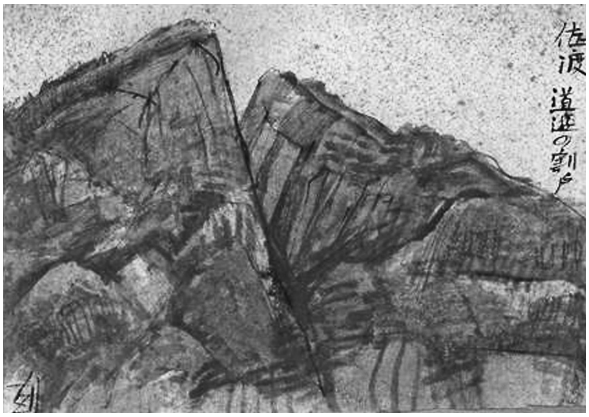
生まれは鴻巣市（旧・吹上町）で、亡くなったあと、生前に親しかった人たちがその事績をのちに伝えようと須田剋太研究会をたちあげた。

僕は、住まいが須田剋太の生家に近く、埼玉県立近代美術館に在職した縁があり、数年前からその研究会に加えてもらっている。

須田剋太は司馬遼太郎とともに『街道をゆく』をめぐり、国内外の風景を挿絵に描いたが、僕はその絵の風景を訪ねて旅するということもしている。時の変化や、須田剋太の絵の特質や、いろんなことが見えてくるが、まったく想定外の展開に出会うこともある。

そうしたこととして、母校に関わる２つのことを記す。

1　船戸安之先生の佐渡の詩



須田剋太『佐渡　道遊の割戸』

2013年９月に『街道をゆく』の「佐渡のみち」をたどって佐渡金山に行ったときのこと。

金の採掘場からすこし離れた山中に水替無宿の墓がある。

深い坑内での作業のために湧き水をたえず汲み上げなくてはならないので、江戸などから強制的につれてこられた人たちが働かされ、水替無宿といわれた。過酷な作業のために短い年月で死を迎えた。

墓の脇に案内板が立っている。一部の文字が欠落していて読めないところがあるのだが、そこに詩らしい一節がある。

「〇ずかな時間で滅んだ君ら、穴ぐらしの過〇
未来を圧せられ、五年ともたなかった、
……」

〇のところは文字が欠けていて、あとの行も脱落している。

僕が高校在学中、国語は船戸安之先生に教わった。

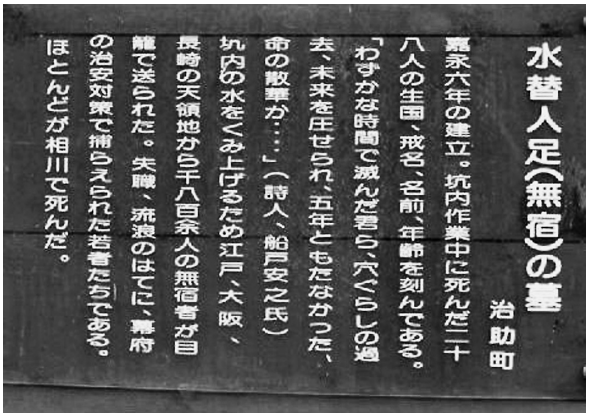
船戸先生が佐渡の水替無宿の墓に行き、そこで作った自作の詩を、授業のときにきかせてくれたことがある。その詩を一字一句正確に覚えているのではないが、詩のリズム感とか、早い死を惜しむ哀悼の気分とかが印象に残っていて、その案内板の一節が、40年前にきいた先生の詩のように思えた。

佐渡から帰ってから佐渡市文化財室にメールで問い合わせると、案内板を作ったのは佐渡観光協会相川支部とのことで、そちらに照会してえられたという制作当時の写真データが送られてきた。

「わずかな時間で滅んだ君ら　穴ぐらしの過去、
未来を圧せられ、五年ともたなかった、
命の散華か……」（詩人、船戸安之氏）

と、はっきり船戸先生の名が記されていた。

40年前にきいた恩師の詩に出会ったことに感動した。


水替人足(無宿)の墓　治助町

幕末六年の建立。坑内作業中に死んだ二十八人の生国、戒名、名前、年齢を刻んである。「わずかな時間で滅んだ若ら、穴ぐらしの過去、未来を圧せられ、五年ともたなかった、命の散華か…」(詩人、船戸安之氏)

坑内の水をくみ上げるため江戸、大阪、長崎の天領地から千八百余人の無宿者が目籠で送られた。失職、流浪のはてに、幕府の治安対策で捕らえられた若者たちである。ほとんどが相川で死んだ。

また、正確な言葉でなくても、詩（の調子や、それを聞いて起きた感情）を覚えていたことにも驚いた。

40年も痕跡を残してしまう言葉の力というものにも感嘆する。

船戸先生の詩であることは確かめられたけれど、詩の全文を知りたくなる。

僕は船戸先生には国語の時間に教わったというだけで、卒業してからはまったく交渉がなかった。

調べてみると、船戸先生がいくつかの著書を出版し、1990年にまだ若い55歳で亡くなっていることがわかった。

埼玉県立図書館などにいくつかの著書が所蔵されているが、その詩を確認できるものはなかった。

僕は1969年３月卒の第21回卒業生になる。

同期の何人かに船戸先生の詩のことを覚えているか尋ねると、佐藤茂くんから「船戸先生は同期の四方田正くんのおねえさんと結婚した」という有力情報をえられた。僕らが在学中のことで、生徒がひやかすと赤くなっていたという。

前の同窓会のときに幹事をしたという浜島義雄くんをたずねて、四方田くんの住所を教えてもらい、事情を説明して詩について心当たりがないか尋ねる手紙を送った。

しばらく待って、ようやく返事がきた。四方田くんはずっと中国で仕事をしていて、2013年11月の同窓会の機会に久しぶりに帰ってきて、僕からの手紙を見たとのことだった。

本庄市に船戸夫人（四方田くんの姉）がお住まいで、船戸先生の著書や、著作が掲載された雑誌が保存されている。お姉さんに連絡をとっていただき、「その詩の所在は確認できないが、家に来てさがしてもらっていい」とのことだった。

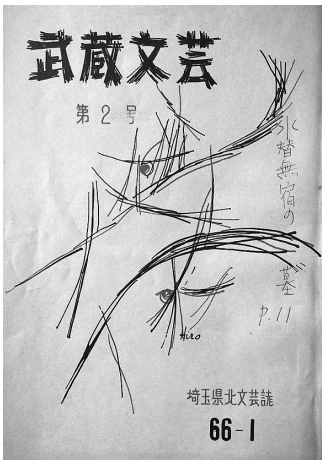
さがしだすのに手間取るかもしれないので、３年生のときに船戸先生が担任で、進路について相談し、卒業後も亡くなるまで年賀状のやりとりをしていたという茨木孝雄くんに同行してもらい、船戸家を訪れた。

２階が書斎で、自作が掲載された雑誌やその原稿が残されている。たくさんの著作があって、こんなにも書かれていたのかと驚いた。

目的の詩は、探しはじめて数分で、同行していた茨木くんが「あった」と見つけだしてくれた。

自作が掲載された雑誌には、表紙に作品のタイトルを鉛筆書きしてあるので見つけやすかった。

1966年刊の「武蔵文芸」第２号に水替無宿の詩が掲載されていた。



水替無宿の墓

雪よ。
笹の葉／にも／石／にも
風ある向きにだけ／積もっては／消える。
……
松太二十一歳

仙之助二十九歳
金八二十二歳
……
わずかな時間で／滅んだ
君ら／穴ぐらしの過去。
未来を圧せられ／五年と持たなかった
命の散華か。
積もること知らぬ／雪よ。
それでも／江戸っ子／なんだ。／と誇示した。
江戸。／の縦文字。
削ろうと試るな。
雪よ。
君らは／この雪を／水の音と／聞くか。
汲んでも／汲みつくせなかった／水の音と。
一月二日というに／祝ってくれる人／とてない
これからも／あるまい。
死してなお。／怨念にひしがれて／ふるえ／立つ。
廃道の墓。

佐渡相川にて

（原文では／も改行）

薄い雑誌に印刷された文字を追いながら、高校の国語の時間に聞いたのは「そうだ、この詩だ！」という思いがわいてきた。

40年も前に、おそらく１度聞いただけの詩を覚えていることに、あらためて驚く。僕は記憶力がいいほうではないから、詩の力、言葉の力といっていいのだろう。

船戸先生が、滑らかとはいえない、ブツブツと途切れがちの口調で、目をしばたかせながらこの詩について語る姿が、リアルによみがえってくるようだ。

今読んでも、いい詩だと思う。国語の時間に自作をいくつも披露したわけではなかったように思う。先生にとっても評価が高い、また思い入れが深い詩だったのだろう。

船戸先生は、執筆時間を確保するために、熊谷高校から自宅に近い本庄高校の定時制に移られたが、病いをえて亡くなられた。書くことに殉じたという印象がある。50代での死はあまりに早く、もっと書きたいことがおありだったろうと惜しまれる。

◇　　◇

1976年の『街道をゆく』の佐渡での取材のとき、司馬遼太郎一行を歴史家の山本修之助さんと山本修巳さん親子が佐渡空港に迎え、案内された。

僕が佐渡で船戸先生の詩に再会したのは、2013年９月のことだった。

そのとき須田剋太が描いた地点をめぐっていて、どこかわからない絵がいくつかあった。帰ってから山本修巳さんにお尋ねする手紙を差し上げたところ、親身な返事をいただき、再度現地を確かめるために2014年の５月に、佐渡市真野新町にあるお宅に伺った。

山本邸で、司馬遼太郎や須田剋太が記帳した芳名録などを拝見したあと、案内していただいて真野を歩いた。

恋が浦という景勝の地の一部が埋め立てられ、須田剋太の絵にある桟橋がなくなっている。

真野湾を高い地点から見おろして描いた絵があり、泊まった高台にあるホテルからの景色のようなのだが、ホテルは解体され、高台からおりたところの道に「佐渡ニューホテル」という看板だけ残っていた。

司馬遼太郎も『街道をゆく』の文章に、恋が浦の美しさや、ホテルのことなど書いているが、風景が描かれたビジュアルな絵は、もっと直接に時間の経過をうったえてくる。

その夜、真野の宿に泊まった。翌朝、山本さんから電話があり、「きのう別のことで資料を探しているとき、船戸さんが書いた小説がのった本をたまたま見つけた」とのこと。

前日、山本修巳さんには船戸先生のことについてもお話ししたのだが、船戸安之という名や水替無宿の詩について、とくに承知されていることはないとのことだった。ところがその日、そのあと、たまたま「船戸安之」の名にいきあたったのだった。

再度山本邸に伺うと、その本は、「歴史読本」の1975年８月号で、船戸安之著『佐渡小比叡騒動』が掲載されている。

この本じたいがちょっとした発見だったが、さらに驚かされたのは、故山本修之助氏の付箋が入っていたこと。

「佐渡小比叡騒動船戸安之」とメモしてある。

歴史家である修之助氏が、佐渡の歴史に関わる小説ということでチェックされていたようだ。

山本邸を訪れたことと、船戸先生の詩に佐渡で出会ったこととは別のことだったのだが、ささやかながら線がつながってしまった。

佐渡で先輩の画家が描き、恩師の作家が書いたものにふれて、懐かしい思い出と新鮮な発見が同時にあった。

２　夏目漱石と「坊っちゃん」と須田剋太

『街道をゆく』の「嵯峨散歩」をたどって京都に行った。

1984年、『街道をゆく』の取材で、司馬遼太郎、須田剋太の一行は、嵐山の渡月橋から、保津川に沿った道を上流に歩いている。

途中、川に面した茶店でオデンを食べているとき、須田剋太が「漱石がここにきています」という。

そのときの経験が、『虞美人草』の一節になっている。

主人公たちが川を下っているとき、客をおろした船を、船頭が岸辺の道からロープでひいて上流の乗船地までひいていくところに出くわす。

須田剋太『嵯峨』

急灘を落ち尽くすと向から空舟が上ってくる。竿も使はねば、櫂は無論の事である。岩角に突っ張った懸命の拳を収めて、肩から斜めに目暗縞を掠めた細引縄に、長々と谷間伝ひを根限り戻り舟を牽いて来る。　　（『虞美人草』夏目漱石）

こういう文章を突然、須田剋太がぶつぶつと諳んじはじめて、同行者たちを驚かす。

大正時代、埼玉県の旧制熊谷中学の読本に出ていたそうである。

「池本先生が」

と、須田さんは、私どもの周知の人名のようにいった。

「国語の先生で、漱石の大のファンでした。これはただの文章じゃない、みな襟をただして読め、というから、みな憶えてしまったんです。」

（『街道をゆく　26』「嵯峨散歩」　司馬遼太郎／著　須田剋太／画　朝日新聞社　1985）

この茶店は二軒茶屋といって、川原に屋台を出していた。そばの岩場に５、６点の濡れた下着があり、須田剋太が「身投げでもあったんですか」とたずねている。

『街道をゆく』を読むと、司馬遼太郎が須田剋太に大きな敬意をもっているのが感じられるが、須田剋太は世間的な大人におさまっていない人なので、ときにユーモラスに描かれる。

「身投げがあればいくらこの老婦人ものんきにオデンを煮ていられまい。」と司馬遼太郎は書いて、『街道をゆく』のなかでも格別おかしいところだ。

今は二軒茶屋はなくなって、細い木に「二軒茶屋跡」と小さな札がかかっているだけだったが、ここを司馬遼太郎と須田剋太が歩いたのかとしのんだ。

京都の旅から帰ってから、前記の船戸先生のことを報告するのにあわせて同窓会の事務局に行き、古い名簿を調べてもらった。

［池本正頴　大正７．４－大正12．３　国語］

とあるのが、「池本先生」だろう。

名簿は異動や退職で学校を去った順に並んでいるが、数行上に

［弘中又一　明治33．４－大正８．３」　数学］

とある。

弘中又一は、熊谷中学の前の勤務地が愛媛県の松山中学で、漱石と同僚であり、『坊っちゃん』のモデルとなった人。

大正７年度は、熊谷中学で池本先生の最初の年であり、弘中先生の最後の年と重なっている。池本先生は、弘中先生をとおして漱石についての理解を深めたことがおおいにありうる。

（校舎の写真で尖った塔があるのは理科棟だったという。僕が通ったころにはなかった。）

須田剋太が熊谷中学に入学したのは、弘中先生が京都の同志社に移ったあとの大正９年４月で、昭和２年３月に卒業した。そのうち大正11年から３年間は病気で休学しているから、池本先生に教わったのは大正９年と10年の２年間か、どちらかの１年間ということになる。

弘中先生が国語の池本先生に漱石のことを話す。

池本先生は授業で漱石をすすめ、青年・須田剋太がいっしょうけんめい漱石の文章を覚えようとしている。

須田剋太の「池本先生が」というひとことと、それを司馬遼太郎が記録しておいてくれたおかげで、100年ほど前の母校のおもかげがうっすら思いうかんでくる。

◇　　◇

熊谷高校の同窓会の事務局で古い名簿を調べたとき、昭和２年（1927年）の須田剋太の卒業時のアルバムも見せていただいた。

「埼玉県立熊谷中学校　第28回卒業生写真帖」とある。

判型は小ぶりで横長。

校長ひとりの写真、校舎の写真、職員一同の写真（職員名はない）のあとに卒業生の写真と名前だけが並ぶ。

生徒の写真は１ページに８人がならんで、16ページ、最後のページだけ７人で、総数127人。

氏名の文字は印刷されているが、それだけの人数の楕円形の写真が１枚ずつ貼りつけてあり、ずいぶん手間がかかっている。

おもしろいのは並びの順序で「卒業生（トリナ）順」とある。

50音順やイロハ順のほかに、トリナ順などというものがあることを初めて知った。1903年に万朝報（よろずちょうほう）という新聞社が、新しいいろは歌を公募して１等に当選した「とりなくうた（鳥啼く歌）」のことという。

トリナクコエス　ユメサマセ
（鳥鳴く声す　夢覚ませ）
ミヨアケワタル　ヒムカシオ（ヲ）
（御世明け渡る　東を）
ソライロハエテ　オキツエニ
（空色映えて　沖つへに）
ホフネ　ムレイヌ　モヤノウチ
（帆船　群れいぬ　靄のうち）

イロハにはかなり濁音が混じっているが、トリナはほとんど清音で無理がなく、意味もとりやすい。20年ほど後の公立中学校の出版物に採用されるほどに普及していたことになる。

写真帖では、そのとおりに、戸田、中田、栗崎、小林、須藤－というふうに並んでいる。

（名前は須田剋太を名乗る前なので本名の須田勝三郎になっている）

須田剋太はきりっと学生服を着て、胸ポケットから白いハンカチがのぞいている。

男子ばかりの学校で、ほとんどが学生服だが、数人は着物を着て写っているような時代だった。ほかの学生たちがいかにもその時代の田舎の青年らしい風貌なのに比べ、須田剋太は、表情も、学生服の着こなしも、スマートで都会ふうに見える。襟元に白いカラーをのぞかせているが、こういうものをしているのも数人だけ。

後年、『街道をゆく』の挿絵を描いていたころの須田剋太は、世間のファッション感覚から浮いた服を場所にも季節にも関係なく着とおした。長く関西に暮らしてからも、熊谷あたりの無骨な言葉づかいを貫いた。

でも若いころはなかなかダンディで、ちょっと意外な気がした。

＊　須田剋太が描いた絵にそくして足跡をたどる旅については、ホームページ［須田剋太の旅］http：//www.kokuta.com/ を参照ください。

また、池本先生についてご存知のことがあればお知らせください。　　（1968年度　高第21回卒）